令和３年度「犬山まちづくり自主学校」レポート

第１回　市長が考える″まちのつくり方″

さあ、犬山まちづくり自主学校、いよいよスタートです。
第一回目は、山田拓郎・犬山市長が考える"まちのつくり方"。
ふだんはあまり訪れる機会のない、市長応接室。
プロジェクション利用中はカーテンを閉めておりましたが、
それ以外は気持ちのいい秋晴れの空の色とさわやかな空気が部屋に満ちておりました。

まずは山田さんから「犬山市はどう運営されているのか？」についてのお話があります。

山田さんが考えるまちづくりの目的は、「みんなが暮らしやすくて豊かに」なること。それを手段（政策）に移し、結果を出して効果を検証し、不十分な点があれば改善するという繰り返しがまちづくりの基本です。
社会は私たち一人ひとりがあって、家族や地域、市町村・都道府県・国・世界、地球、宇宙、大自然へと広がっていく。
複数の人が集まると､みんなですべてのことを考えて実行していくわけにはいかないから､市長、市議会議員を選挙で選んで、どんなまちづくり（事業）をして、それにいくら使い、どんなルールをつくるか代表者として考えてもらう。
そして、その方針にもとづいて、市民が出し合った税金から、生活に関わる大事な仕事の一部を市役所にお任せする。

簡潔でわかりやすいお話を聞いた後は、「まち」「市」という何か漠然とした大きな枠組みだったものが、より具体的なプロセス＆プロジェクトの複合体として、少し身近になって考えられるような気がしてきます。そして、そのプロジェクトにわたしたちは、選挙だけでなく、要望を伝えたり、相談したりという形で、参加することができる。

でも選挙以外に、声はどうやって届けることができるんだろう？という疑問も頭に浮かんできたりもします。

後半は対話の時間となります。
まずは参加者ひとりひとりから、感想、疑問、参加された理由などお話いただきます。

犬山市のことをもっと知って好きになりたい。小さいまちだからこそできることをやっていきたい。安心して住めるまちにするために地域コミュニティを持続、活性化させたい。コロナ禍で財政運営が厳しくなっているんじゃないか？　まちなかの緑や自然をもっと残していきたい。学校給食等における食の安全性を守っていきたい。こどもを対象とした活動をはじめたい。多様な生き方を受け入れられる場づくりをしたい等々。

ひとりひとりから溢れるようにエピソードが紡がれる。伝えたい声がこんなにみんなのなかに詰まっている。そんなことが実感される時間でした。

参加者だけでなく、スタッフも市役所職員も市長も、参加者と一緒になって自分の考えを話したのもあって、自己紹介タイムだけで予定の時間はいっぱいに。最後に山田さんからひとりひとりの声にも応答いただき、予定の時間を 30 分オーバーしての終了となりました。

本当は自己紹介の後に、参加者同士の対話の時間を設ける予定でしたが、一人ひとりの話を聞いていくだけでも、十分に対話的な時間になっていたのではないでしょうか。一人ひとりが言いっぱなしになるのではなく、それぞれの話を聞きながら、自分の考えを再確認していくような、そんな場が生まれていたように思います。

ここも一つの声を伝える場。そして、その伝え方を学んでいく場でもある。

まだまだ一回目ですが、いろんな思いに触れることができ、あっという間に時間が過ぎていく充実した時間でした。

ゲストスピーカーの山田市長、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました！

次回は金曜、こども対象の「夜の図書館」講座です。こどもたちからはどんな反応が生まれるか、とても楽しみにしています。

（ミナタニ）

第２回　夜の図書館。こどもと市長のまち談義。市長が考える″まちのつくり方″

まちづくり自主学校第２回目。今回はこどもを対象に夜の図書館での開催です。
こどもと対話するならどこがいいだろう、わくわくするような学びの場はどこだろうと考えたときに、まっさきに頭に浮かんだのが、3 月にリニューアルしたばかりの犬山市図書館２Ｆこども読書空間です。森をイメージした空間にはソファーやテントが置かれています。知の集積庫である図書館に、みんなで夜に集まって、まちについての対話ができるなら、そんなわくわくする体験はないだろう。犬山市では前代未聞の企画でしたが、それがどんなに素敵な体験になるはずかをお伝えしたら、なんと開催できることに。関係者のみなさんの柔軟な対応に感謝です。

はじめに市長の山田拓郎さんから 1 回目と同じく、犬山市のまちがどうやって運営されているかについて説明してもらいます。大人の回とスライドの内容は同じですが、こどもにもわかる言葉や無人島の例などを挙げてのお話です。市長の仕事と給料の話にはこどもたちは興味津々。何かあったときの責任を一身に引き受けながら毎日を過ごすなか、1 年に約 1000 万円という金額が仕事に見合って高いのか、低いのか、相応なのか。こどもたちはなかなか具体的なイメージがつかないようです。

その後は休憩をはさんで、こどもとの対話の時間。
「理想のまちってどんなもの？」という問いに一人ずつ答えてもらいました。

・きれいな学校になる
・まちで VR ができるような場所があるといい
・自分の家の周りは田んぼばかりだから近くにコンビニが欲しい
・自然がもっとある場所がいい。
・動物園がほしい

・自然とふれあう機会を増やしてほしい
・サバイバルゲームのできる場所があるようなまち
・こどもがもっと遊べる場所が欲しい
・洋服が買えるお店がふえるといい

具体的なまちに対する要望が続くなか、最後にこんな発言が。

・やさしい人のいっぱいいるまち

市長からは一つひとつの意見に対して、まちとしての取り組みやできることできないこと、すでにやっていることや、今後の見通しなど、丁寧な応答がありました。

みんなで対話、といきたいところでしたが、まだまだ今はその手前。
「もっとこういう場があれば、、、」と、終わり間際に市長に気持ちを伝えていたこどもがいました。場があることで対話が生まれる。そうした機会を少しづつ作っていくことの大事さをかみしめた時間でした。

ご参加いただいたみなさま、スピーカーの山田さん、関係者のみなさま、ありがとうございました！

（ミナタニ）

第３回　文化や伝統から考える”まちのつくり方”　石田芳弘さん（犬山祭保存会長）

秋晴れの清々しい土曜日。新型コロナの余波も大分収まって、犬山の城下町は人だかりができるくらいの観光客でにぎわっています。今日の会場は犬山城に続く目抜き通りにある「IMASENからくりミュージアム」。もともとは向かいの古い町家を改修した趣のある建物内（現・ココトモファーム）にあったのが、昨年６月に犬山市文化史料館隣に移転新装オープンしました。

今日のゲストはその館長でもある、犬山祭保存会長の石田芳弘さん。石田さんは犬山市長（1995年～2006年）もつとめられ、今ある犬山のまちの方向性を一から考えて作られてきました。全国学力調査に唯一参加しなかった市として注目を浴びたのも、石田さんが市長だった時代の話。

”犬山のこどもは犬山で育てる”　をモットーに、点数だけで序列化を図ったり、教育の現場に競争原理を持ち込むのではなく、こどもを中心に、市民みんなで、犬山のまちをつくろうと、様々な改革に奔走されました。

人生は人との出会いによって、予期せぬところにまで導かれます。
石田さんにとっての運命の出会いは、今年５月に惜しくも亡くなられた、犬山に拠点を構える京大霊長類研究所（※1）所長、日本モンキーセンター所長を歴任された河合雅雄さん（1924-2021）。霊長類学者であり、思想家、児童文学者でもある河合さんを座長に、第４次犬山市総合計画（1999年度～2010年度）が練られ、できあがった犬山のまちのヴィジョンは、豊かな川と森に囲まれたヨーロッパ随一の文化都市ウィーンを範としたものでした。

”木曽の流れに　古城が映え　ふれあい豊かな　もりのまち　犬山”

森の思想に裏打ちされた、詩情に満ちたこの言葉に支えられながら、石田さんは城と里山を軸に据えた、犬山のまちづくりを進めていきます。その背骨となるのが、「全市博物館構想」でした。

まちの全てが博物館であるならば、そこで暮らす人びとは、いつでも、どこでも学びつづけることができる。生涯学習の最良の教室としてのまち。そして、犬山城下を特徴づける古い町並みは大切に残し続けていかなくては、城下町としてのアイデンティティは薄れてしまう。
「古い町並みのないまちは、記憶を喪失した人生と同じ」。
からくりミュージアムが建つ本町通りも、石田さんが市長になった当初は道路拡幅計画が進み、あわや記憶がなくなっていく寸前でした。果たしてそれでよいのかと、「まちづくり検討会」が設置され、道路拡張ではなく、古い町並みを残す形で城下町再生が図られました。

「まず議論を尽くすこと」という信念のもと、地域の住民が実際に足を使って他都市の視察に出かけ、専門家の意見を聞き、考え、議論に議論を重ね、自分たちでまちづくりを本気になって作りあげていこうとする。そのスリリングな展開については『よみがえれ城下町－犬山城下町再生への取り組み』（風媒社、2006 年）に詳しく書かれているのでぜひ参考にしてみてください。

石田さんの犬山愛に溢れたざっくばらんで熱い話は尽きません。
他にも、市長になった動機、市と国との役割分担と予算の話、犬山城秘話、犬山祭物語、木の文化、からくり人形、古墳の神話、折口信夫の来訪神の話など、英雄であるとともに破壊者で、いたずら好きで憎めない、トリックスター的な側面が存分に発揮された語りでした。そして、その語りが体験談による、（客観に近い）「ドキュメンタリー」とはまた違ったレベルの、経験談による（主観に近い）「アニメーション」であることもあらかじめ伝えられ、（鵜呑みにしないよう釘もさしておくという）目配りも利いたストーリーテラーです。市長時代にもこうやって、「物語」を通じてまちを紡ぎあげてこられたのだなということが実感される時間でした。

途中、からくり館で定期的に行われている犬山高校の「からくり文化部」の学生さんたちによるからくり練習の様子と、茶運び人形の実演を見せてもらったりと、盛沢山な内容でした。

今回は参加者の自己紹介はなしで、感想と質問を話してもらいました。出てきた質問のなかで、市は城下町には力を入れているが、それ以外の地区は手薄なのではないかという話がありました。それに対し、石田さんは、城下町は人が集まり、視線を集める「顔」の部分（あるいは、野球の 4 番バッター）。そこをぼやけたものにしてしまうと、まちは求心力を失って拡散してしまうと言います。そして、第 4 次計画の「城」と「森」の共存したまちのあり方を例に、他の地区の整備にもかなりの予算は割かれているとのこと。そして、もっと買い物がしやすくなるような郊外型の大型店が欲しいという意見が市民からもよく出てきますが、それによって失われる代償に見合うものかという視点も必要だということを具体的な例をもとに話されます。その話を聴いて、子育ての最中は一度にいろんなものがまとめて買える場所が欲しいと思っていたが、犬山の良さを守るためであれば、少し足をのばしても近隣の町に出かけてもよいと思えるといった参加者からの話も出てきました。

でも、こうやって話を聴くと、犬山のまちのすごさ、良さが実感されてはくるのですが、年月をかけてたくさんの人が考えに考えを重ねてきたまちづくりの原点のようなものを、どうして私たちはもっと身近に伝え聴くことがないのだろう。
さらには城下町の観光地化が進み、どこの観光地にあってもおかしくなさそうな店が軒を連ねる。ここはまちの住民によって「まちづくり」が本当になされているといえるのだろうか？　今の城下町の姿は本当に目指されていたまちのあり方なんだろうかとか、いろんな疑問も浮かん

できます。

石田さんの最後の締めは、「まちづくりは未完成交響曲」という言葉。
まちに関わる一人ひとりがプレイヤーとなって奏でる音楽は、まちが存続する限り、終わることはないのでしょう。
どういう曲を奏でていくか。
それこそ、生涯学習を通じて考えていくしかなさそうです。

次回は知の拠点でもある「大学」を現場に活躍する岡田和明さん、掘美鈴さんをお招きして、「人づくりと地域の連携から考える”まちのつくり方”」について考えます。まちづくりの知はどうやって集積され、伝えられ、現在や未来につなげていくことができるのだろうか。

たくさんの考えるきっかけをいただいた石田さん、参加いただいたみなさま、ありがとうございました！

（ミナタニ）

※1　京都大学霊長類研究所は、日本の霊長類学の第一人者で文化人類学者であった今西錦司らが設立に貢献し、霊長類に関する総合的研究を行う目的で 1967 年、京都大学の附置研究所として、愛知県犬山市に設置された。霊長類研究において、日本だけでなく世界的な研究拠点として重要な役割を果たしてきたが、研究費不正支出に端を発し、今年 10 月に組織編制が決定し、2022 年 4 月より「ヒト行動進化研究センター（仮称）」に移行する。

第４回　人づくりと地域の連携から考える“まちのつくり方”

今回は知の拠点でもある大学と地域の連携、人づくりについて考えます。
場所は犬山駅下の素敵なカフェのようなレンタルスペース・ハチ公園さんです。ゲストは岡田和明さん（名古屋経済大学　地域連携センター長）と、堀美鈴さん（名古屋経済大学　保育教育学科講師）。

岡田和明さんのお話

岡田さんはもともとは犬山市の職員として、建築課長、歴史まちづくり課長、総務部長を歴任し、副市長も務められました。2015 年からは名古屋経済大学に移られ、現在は地域連携センター長として地域の課題解決などの社会（地域）貢献に携われています。

名経大に「地域連携センター」なるものがあるのをご存知でしたか？
”「地域で学ぶ」「地域と学ぶ」そして、地域から愛され、頼られる名経大へ”
ということで、社会貢献として、大学のある犬山市と様々な連携をしています。

岡田さんから連携の具体的な内容についていくつか例を教えていただきます。

◎地域との連携会議
・犬山市、犬山商工会議所との包括協定（2007 年）
・犬山市議会との協力協定
・犬山市観光協会との覚書
◎知の拠点としての地域に向けた活動
・犬山学研究ネットワーク
・犬山学サロン
・市民総合大学オープンカレッジ
・企業との共同研究
・犬山市民の図書館利用

そして、こうしたイベントやボランティア活動への参加を通して、学生と地域の関わりを深める取組みをしています。
今どきの学生事情は、
・忙しい
・情報は自分から取りに行く（新聞はほとんど読んでいなさそう）
・高校までの間に地域活動やボランティアに関わった経験が意外と多い。（50%くらい？）
・地域に貢献したいという想いがある。
・就職活動は 3 年生の後期くらいからはじまっている。

こうした学生を社会とつなぎ、地域で学び、地域から学ぶ循環を作っていくことが地域連携センターの役割でもあります。

”大学は、まちをつくる”ヒト””コト”・・・のプラットフォーム！！（？）”

一見敷居が高く感じられる大学ですが、こんなにいろいろなアウトリーチ活動を行っていることがわかり、参加者からも驚きの声がでました。

最後に岡田さんからはこんな言葉が。
「ないものねだりではなく、ありもの探し。犬山にはまだまだ隠れた良さがある。」

たくさんの探し甲斐がありそうです！

堀 美鈴さんのお話

次いで堀さんからのお話です。
堀さんも犬山市の職員として、保育園で保育士として働かれた後、犬山市の子育て支援センター、ファミリー・サポート・センターの立ち上げに関わられ、母子生活支援施設の施設長、こども未来課の初代子育て監を歴任されます。2018 年からは名古屋経済大学の保育学科で特任教授を務められ、現在も非常勤講師として教えられています。

1999 年（H11 年）、犬山市に子育て支援センターが開設されました。子育ては個人でするものなのに、どうして市役所が関わるのかといった声もあがったそうです。堀さんは孤軍奮闘しつつも、市を超えた県の仲間と、愛知県支援センター協議会を全国 2 番目に創設。前例がないだけ

に、これはと思ったことは何でもやってみることができるような環境のなか、公用車にござやおもちゃを積んで、行商みたいな形で相談にまわったりも。新しいものを創り上げていくなか、堀さんが心がけたのは、「次の人につなげていく。後に続く人のために、形にすること」だったそうです。

母子生活支援施設では、弁護士、医者、警察など、それまであまり関係のなかったようないろんな属性、職種の人たちとの関わりもあり、視野が大きく広がるような経験をつまれます。

そうした経験を活かし、大学に移ってからは、学生たちに社会に触れながら試行錯誤をするチャンスを与えるような学びの場を作られています。
失敗する前にダメと言われ、やらないことが多い現代っ子たち。保育士の離職の原因は、人間関係や現実と理想とのギャップが大きいという調べがあるようです。社会人として未熟なまま、保育士として、最前線に立たされる保育士の卵たち。そうした学生たちに「失敗する場」を与えるのが大学なのです。

堀さん自身、仕事をしながら子育てをされてきました。そうした立場から、仕事と子育ての両立ができ、女性が生きがいをもって働くことができる社会を作ることに、当事者としても向き合われてきたそうです。
参加者から、子育てと家庭と仕事をどう両立させればいいのかとの問いかけがありました。
「大事なことは人に頼ること。それは自分をさらけだすことでもあって、勇気のいることでもあるけれど、大事なこと」ときっぱりと答えられていました。

今後の課題

今回の話のなかで課題として浮かび上がってきたことがあります。

必要な情報はどうやって手に入れることができるんだろう？
（大学や行政の側からすると、どうやって伝えることができるんだろう？）

岡田さんの話にもありましたが、今どきの大学生は、情報は必要に応じて自分から取りにいくもの。興味がない対象にはアンテナが向かないから情報が入らない。

生涯教育とはまた違った、社会人の新たな学び直しの機会であるリカレント教育を受けたいと思ったときに、大手企業のなかで提供されている以外に、どうやったらそういうものが学べるようになるんだろう。

子育て真っ最中の親たちは情報を探して取りに行く余力がなかったりする。頼りたいと思ったときに、気軽に頼れる相手がいない。制度があるのはわかっても敷居が高く感じられる。

なかなかこれといったショートカットの手段はあるわけではなさそうだけど、人とつながっていくことで、少しずつ情報には近づいて行けそうな気配もあります。

このまちづくり自主学校も、試行錯誤を通じた学びの機会と、情報への道筋を模索する場としてあります。

こんな人の話が聴きたい、こうしたいけどどうやればいいんだろう。
いろんな課題やハテナに継続的に取り組みつつ、みなさんと一緒に考えていければなと思います。

ゲストスピーカーの岡田さん、堀さん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

次回は 1 月 18 日。大島もえさんをゲストにお迎えします。
市議会議員ってどういう仕事？　社会課題に向き合ったときに、どうやって政治を動かして解決する方法があるの？
こちらも刺激的な話が聴けそうです。

（ミナタニ）

第５回　元女性市議と考える”まちのつくり方”

今回はゲストに元尾張旭市議会議員の大島もえさんをお迎えしました。
そして、もえさんを紹介くださった山田市長も忙しい合間を縫って特別参加。
場所は前回に引き続きハチ公園さんです。

前例を作る

もえさんは衆議院秘書を経て、2003 年から尾張旭市議会議員を 4 期×4 年=16 年つとめられました。その間いろいろな「最初」を達成されます。
26 歳の初当選のときは、最年少当選。それから 16 年の任期のなかで、もえさんは 4 人のこどもを出産。議員在任中最多出産となります。

最初ということは、それまでに前例があまりないこと。特に 4 人のこどもを出産し、育てながら市議をつとめるということは、男性中心の議会のそれまでの仕組みのなかに存在しない在り方でした。マイノリティとしてのもえさんの存在が、様々な制度上の隙間を浮かびあがらせます。

たとえば、産休、育休の問題。議員が出産して議会を休まないといけないということがそもそも想定されていない。議員は「労働者」ではないので、労働基準法の埒外にあるのだそう。保育園に入るための就労証明も自分で提出するしかない。様々な壁を乗り越えながらも、もえさんは次に続く女性議員や、社会のためにも、自分のケースが今後の事例となることを視野に入れた仕組みづくりを考えます。

ニュージーランドのアーダーン首相も首相就任直後に妊娠がわかって、6 週間の産休をとったことで話題になりましたが、その間、職務は副首相が担当していたんだそう。コロナ禍での自宅からの丁寧で自然体での発信も話題になりましたが、多様な生き方、仕事のあり方を目の当たりにして励まされた人たちは世界中にいたはず。家庭やケア労働は女性にまかせて、男性が外で働き、政治も動かすといった旧モデルからバージョンアップした、新しい政治がまさに世界中でおこ

りはじめています。日本にもそうした流れを生むべく、もえさんは「出産議員ネットワーク」や「子育て議員連盟」などの活動にも関わっています。

新しい価値の風呂敷をつくる

もえさんにとって議員とは、第一義に　lawmaker（法律を作る人）だそう。世の中はマジョリティを基準に作られていて、想定されていなかったマイノリティについては、そこに必要な物事がなかなか法制化されていません。法制化するということは、社会化するということ。たとえば、以前は介護は女性の役割や家庭のこととされていましたが、それを個人や家庭の問題ではなく、社会が向き合うこととして、社会の仕組みのなかに入れようということで介護保険が導入され、今ではみんながそれを当たり前のこととして享受しています。

自分が議員として目指す役割は、”なきものにされた人を社会の仕組みの中にいれる、新しい価値の風呂敷をつくること”という言葉にはぐっときました。

人は生まれた境遇（性別、家族、場所、国 etc.）によっていろいろともって生まれたカードが違います。
・その人がその人らしさを抱えたまま暮らせる世界とはどういったものか。
・どんな仕組みが変わると、自分が感じる生きづらさが克服されるのだろうか。
・社会はどうやってアップデートされていくのだろうか。
こういった問いに答えるためには、特権をもつマジョリティがその特権性に気が付き、そこを起点に変えていくということや、個人に由来すると思っていたことを社会の構造によることと価値転換して考えてみることにヒントがありそうです。

そして、その考えを人と共有し、対話することが大事。でも、同じ言葉を使っていても話している内容が一緒じゃないとかみあわない話を続けることにもなるので、言葉の定義をそろえるということも、とても大事なこと。もえさんはよく主義主張をしていると、人とケンカにならないですか？と聞かれるそうなのですが、意見は反対でも、この町のことをよくしようと思う仲間同士なので、ケンカになることはない、と答えられるのだそう。
ボルテールの「あなたの意見には反対だが、あなたがそれを主張する権利は命をかけて守る」という言葉も紹介いただきました。

もえさんが発行した「私の未来手帳」。人生 80 年として、約 100 回（国政選挙 40 回＋地方選挙 60 回）の投票機会があります。18 歳の成人記念の贈り物にもぴったり。

協働すること

さぞかし苦労の連続であったと思われる実体験と信念にもとづいたお話を、やわらかい口調でにこにこと楽し気に話されたのを聞いた後には、参加者からもたくさんの言葉が自然とするすると出てきます。そこではこんな感想と話したいテーマが挙がりました。

・　家族も含めた他の人との協力体制はどうやって作っていけるのか？
・　若い人にどうやって政治に興味をもってもらえるか？
・　どうすれば女性だから、男性だからといったような性別による差別のないような社会が作れ

るか？
- どうすれば家父長的な価値観が身についた世代の考えを変えることができるか？
- 自分のことを話すことに慣れていないのが問題ではないか。多様な世界にもっと目をむける必要があるのでは？
- やりたいことを実現しようにも、子育ての大変さからあきらめてしまったり、モチベーションが下がるのはどうすればよいか？

それを受けて、もえさんからは、夫や家族、支援者を巻き込みながら、チームとして協働することの大事さを、これまでの実人生の例などから話してもらいました。自分のやりたいことを実現するためには、わがままでいることも大事。でも、それを自分の権利として主張するのではなくて、関係する相手との対話や交渉は欠かせない。親としては、そうした自分の生きざまや人生をそのままこどもに見せて、自分で生きていく力を養ってもらう。差別的なことやおかしいと思ったことに直面したときには、それはおかしい、と思うことを伝えていく。でも、それを直球でいくのではなく、その言葉をオウム返しで相手に問いかけてみる、などの工夫も有効、といったお話もうかがいました。

もえさん曰く。無人島で一人で暮らしているなら政治はいらない。いろんな人、価値観がある人と人の間で暮らすわたしたちであるからこそ政治が必要。毎日の選択、今の積み重ねが歴史をつくる。ヒーローを待つのも、一人の 100 歩に頼るのでもなく、100 人の 1 歩を踏み出そう！

「人々と共に政治を。」そんなことがとても身近に感じ、考えることができる時間でした。
政治って何か自分とは遠い出来事なのではなく、日常のなかで、自分が自分らしくある方法を探りながら、特権や不都合に気がつけばそれを改善しようとし、一歩一歩考えを進め、参加することができるものだということが実感できたような気がします。

ゲストスピーカーの大島もえさん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

本年度のまちづくり自主学校はこれで終了です。
ゲスト、参加者、スタッフがみんなで熱量をもって考え、話した時間はかけがえのないもので、次への一歩を踏み出せそうな予感がします。
次年度は、まちづくりに関するもう少し実践的なワークショップも含められないかと計画中。お楽しみに！

（ミナタニ アキ）